

ARCLE理事からのメッセージ シンポジウムを終えて

根岸 雅史 (東京外国語大学)

ICTは加速度的に今日の教育現場に入り込んできています。その勢いは、私たちにICTとそもそもどう向き合うべきかを考える余裕さえ与えてくれません。そこで、今回のシンポジウムでは、いったん立ち止まって、ICTの学校での活用状況に関する調査結果を概観し、私たち英語教師はこの新しい状況にどう向き合っていくべきかを議論することにしました。英語教育とICTは相性がいいとよくいわれています。ICTは、教室に生の音声や動画を持ち込むことを容易にしてくれました。しかも、その完成度や手軽さは昔とは較べものになりません。音声や文字の提示やドリルなどもお手のもので、ICTのこうした側面は、確かに、教師の負担を大きく軽減してくれています。ただ、それと同時に、ICTのC、つまり、Communicationが英語教育では特に重要です。ICTを使って、英語の教室でいかに豊かなコミュニケーションを実現するか。次のステップ、教室内コミュニケーションの大きな変革を期待しています。

金森 強 (文教大学)

個別最適教育の実践において、ICTの利用は欠かせないはずである。学習者の能力、学習スタイル、特性に応じた、多様な教材を提供することが可能となるからである。ICTを用いた授業の発表も増えてきており、その可能性に多くの期待を感じる。ただし、紹介される内容は、「知識・技能面」の指導に関するものが多く、テクノロジーの進化を紹介してくれているが、学びの深化までは見られない場合もある。「思考・判断・表現の能力」や「協働的な学び」「主体的で対話的な学び」に働くICTの効果的な利用法の開発が、これからの課題と言えそうである。学習者の作成した成果物をタブレット等のスクリーン上で共有するだけでは、高次の思考能力育成、学力向上につながっているかどうかは分からない。そこに、学習者の思考を深める活動、手立てが必要であり、その役割を担えるのは人間教師に他ならない。今年も、このシンポジウムを通して、多くのことを考え、気づく機会になった。

和泉 伸一 (上智大学)

最近の教育現場はICTの導入によって、情報と内容が豊富になり、かつテンポのよい授業展開が可能になってきた感があります。ICTの利点を最大限に活用しつつ、人と人との交流の大切さ、Communicationの重要性を忘れてはならないでしょう。“使わねばならぬ”といった強迫観念ではなく、4技能5領域のCommunicationの充実と活性化、そしてそこから起こる児童・生徒の学びのための“ツール”として、ICTを活用していただければと思います。その関連で、一昔前までは「学んでから使う」が当たり前でしたが、現代の子どもたちは「使いながら学ぶ」ということを自然と無理なく行っているようです。スマートフォンが典型的な例です。使っているうちに、また互いに教え合ったりしながら、いつの間にか使いこなすようになっていきます。ICTの導入とともに、英語教育でもこういった学びのあり方を参考にいただければと思います。CLILの“Learn as you use, use as you learn.”(「学んでは使い、使いながら学ぶ)の考え方と共通しているところです。

ARCLE 理事からのメッセージ

シンポジウムを終えて つづき

酒井 英樹 (信州大学)

文部科学省から『教育の情報化ビジョン～21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～』が発表されたのが2011年です。10年が経過した現在、今回の調査報告が示すように、GIGAスクール構想の後押しもあり、教育現場の中でも日常的にICTを活用することが増えてきました。また、調査結果から、先生方も、情報を得たり話し合いをしたりといった協働的な学びのツールとして、認識するようになっていくことが分かります。

ICTの活用によって、英語教育における言語活動をリアルなものにすることができるという利点を生かして、今後言語活動がより充実し、児童・生徒が英語でコミュニケーションする機会が一層増えることを期待します。俣野先生の実践研究発表では、俣野先生が、児童がICTを活用しながらどのように学んでいくのかということをよく観察し、受け入れ、指導に取り入れていく姿が印象に残りました。従来の指導方法を固持するのではなく、教師としての柔らかさを持ち、教育観や言語観を更新しつつ、英語教育を実践していくことが重要であると感じました。

長沼 君主 (東海大学)

ICTの活用によって、学習のプロセスの可視化や共有をしやすくなり、協働的な学びや思考の整理が促される可能性が示されたが、それらはICTの工夫による効果なのか、そもそもの学びの工夫による効果なのだろうか。今回の実践では書き手のコメントへの応答的かつ焦点的なピアフィードバックが工夫されていたが、これは従来型の教室でも可能な工夫であり、学びの工夫がないところにはICTの効果も減少するであろう。また、実践者から問題提起があったように、ICTを活用した授業において、コミュニケーションに取り組む意欲の向上や抵抗感(不安)の減少を促すためには、デジタルだからこそ感情や情緒性を失わないような、教師からの共感的な言葉かけや学習者間の支援的な関係性(風土)の構築が、今以上に重要となるだろう。CEFR Companion Volumeに6つめの領域として、オンラインでの言語使用上のやり取りに関するレベルごとのCAN-DOも示されており、ICTを活用したやり取りの特徴を踏まえた学びの工夫についても議論していきたい。

工藤 洋路 (玉川大学)

ここ1、2年で1人1台端末の実現が進み、様々な形でICTが活用されている授業を見る機会が増えました。最初は効果が分からないところで、タブレットなどを使って指導を始めた先生方も多いと推察されます。今回のシンポジウムでは、スマートディスプレイのJamboardを使った「端末型」のクラスと、紙のワークシートを使った「従来型」のクラスの比較を通して、指導や学習の違いの検証結果を報告しました。新しいツールを使うことで、そのツールを使う場面以外においても、教師の支援の方法などが変化することが分かりました。今後の教師教育では、新しいツールを使った場合に授業全体の構成がどのように変わるのか、そして、ツールがある中で教師がどのような支援や働きかけをするべきなのか、といった点を考えていく必要があると感じました。児童・生徒は新しいものにはすぐに慣れてしまう一方で、飽きるのも早いため、ICTの活用を進めることが期待する能力やスキルの向上にどのようにつながるかを今後考えていきたいと思えます。

「心に残った気づきや学び・これから取り組みたいこと」

～参加者アンケートから～

小学校教師

- ◎教室における最大の環境要因は教師であり、ICTのCommunicationの部分で最大限引き出せる教師であることが大切だと学ばせていただきました。

中学校教師・中高一貫校教師

- ◎活動の意味づけ、動機づけ、もっと生徒がワクワクしてやりたくなるような課題の設定をより意識して、授業を組み立てていかなくてはいけないと感じました。手段としてのICTのことを考えれば考えるほど、本質的なものが見えてきた気がしました。
- ◎今までICTを従来業務の効率化のために用いていたが、実践報告・実践研究を拝見・拝聴して、生徒の言語活動を豊かにするためにいかに活用していくかという視点で教材研究と授業計画を立てる必要があることに気づいた。
- ◎生徒一人ひとりにALTから動画でメッセージや質問を送ることや、発音の仕方を動画に撮って口元にも注目させることなど、日頃の授業での実践例がとても参考になりました。
- ◎振り返りシートでのICT利用。スプレッドシートの共同編集を使うことで仲間のコメントも読めるというのは目からウロコでした。自己調整、そして、協働学習にもつながることを期待して実践してみたいです。

高校教師

- ◎生徒へのフィードバック(writingへの返答など)をしっかり行い、ICT主体の授業ではなく、ICTの力を借りた人間同士のコミュニケーションのある授業づくりを意識したいです。
- ◎ICTを用いることで生徒は情報を多く集めることができ、意見をシェアしやすいと、よい点ばかりに目が向いていましたが、従来型と比べた結果などを見て、よいことばかりではないということに気づきました。ICTに振り回されず、ICTをツールとしてどう使うかを今一度しっかり考える必要があると思いました。
- ◎津久井先生のご発表の中で学生がICTを使うことで英語よりも日本語に多く触れることが起きるかもしれないが、英語を使う活動にどのように収束させていくかというお話が、大変参考になりました。ありがとうございました。

教育行政関係

- ◎ICTのCommunicationを意識することが重要。伸ばしたい資質・能力に合った活用法の研究が必要。

研究機関

- ◎大学生に英語を教える際、小・中・高での学び方や傾向を無視できないだろうと思い、受講しました。小・中・高で目指すコミュニケーションと大学生が目指すコミュニケーションはどこが似ていてどこが違うのかなど、コミュニケーションのための英語が今後どうなるのか、教師は何ができるのかを明確にしなければいけないと感じました。

学生

- ◎ICTを活用することによって、生徒の特性に合わせた学習が可能になること。また、生徒一人ひとりの取り組みの過程を見える化できること。
- ◎実践例をうかがって、子どもたちの発想によって教師自身も新たな発見があり、それをもとに試行錯誤しながら取り組んでいることが分かりました。テクノロジーに慣れ親しんだ子どもたちにとっては、タブレット学習の方がかえって取り組みやすく、英語への不安や嫌悪感を減らすことにつながると考えると、活用のしがいがあると感じました。しかし一方で、ICTは道具であって、個々の生徒に気を配り、様子を見ながら授業内容を考えていく最も重要な役割は、人間である教師が担うものだと、改めてその重大さを認識することができました。
- ◎ライティングもコミュニケーションであり、添削の際は、内容面へのアプローチが必要だということ。

民間企業

- ◎ICTを使うことで授業の可能性が広がっていくことが、改めてよく分かりました。また、ICTを使うことで効率化やできなかったことができるようになるが、一番大事なのは、それを子どもたちのためにどう使うかという根本的なところ。
- ◎ICTは何のために使うのか。生徒の学び支援であるので、それに必要なことは何かを改めて考えたい。生徒だけではなく、教師側の変化も必要であるということ。